G－8ジャカルタ駐在員

885. 日本料理店の繁盛

今日、インドネシアに在住する日本人は約1万人強である。人数だけみると太平洋戦争前も同じくらいの日本人が当時の蘭印に居た。今の日本人が戦前と異なるところは、第一に滞在期間が短いこと、第二に日本人が金持ちになったこと、第三にジャカルタに集中していることである。

戦前の日本人は一種の移民であったが、今のインドネシア滞在の日本人の 60%はいわゆるジャカルタ駐在員という企業の尖兵とその家族である。

最も切実な食べ物であるが、戦後の日本料理店は1969年開店の「菊川」を嚆矢(こうし)とし、その後、雨後の筍のように増えた[1]。ホテルの中の白人も見かけるテンプラやシャブシャブの専門店、それに寿司店、あるいは、インドネシアに居ることをふと忘れるような和風料亭から一膳飯食堂まで、ピンからキリまでいろいろである。

近年は日系企業の撤退と経費削減でかつてはジャカルタで闊歩していた日本人駐在員も減り、日本食レストランに代って韓国料理レストランが幅をきかせている。韓国人は 3.5 万人といわれている。

日本料理のほとんどの材料は米も含めてインドネシアで調達可能である。店員の人件費も安い。しかし什器や備品を日本から運び、店の作りも日本風にするとかなりの資本を必要とする。昼食時のジャカルタの“うどん屋”は日本のビジネス街の食堂と同じ風景である。「うどん定食」もメニューにある。日本のビジネス街と異なるところは日本人主婦のグループ連れの姿が多いことである。昼食のウドンの円換算価格(500 円前後？)は日本とほぼ同じであり、ウドン定食にまでつく盛り沢山のフルーツを考慮するとむしろ安い。

しかし、この価格もワルン(→858)で庶民が食べるミーゴレン(→760)と比べると十倍以上である。即ち、日本人の昼食一回分はインドネシア人の2週間分の昼食になる。それが料亭にでもなると一回の食事代がインドネシア人の従業員の数ケ月分の給料になるだろう。

日本から輸入した“日本の味”は赤道を越えて長い時間をかけて店頭に並べられるために保存剤が使われているためか、味は悪いような気がする。

それにしても日本料理の店がふえたのも、味噌や醤油は「かもめスーパー」「COSMOS」「PAPAYA」など日本食専門のスーパーできたのも日本の経済力であろう。

ブロックM(→163)近辺に住む限りこれらの恩恵で日本食の材料の調達には不自由はない。自家製の豆腐や漬物をつくるなど食べ物を巡る先人たちの聞くも涙のでるような苦労話はジャカルタでは伝説化しつつある。

しかしインドネシアは限りなく広大であり、真珠の養殖やダム建設のためインドネシアの僻地で日本食に苦労している日本人はたくさんいる。

886. トゥアンであること

インドネシア語の「トゥアン（tuan）」とは「主人」のことである。植民地時代におけるインドネシア人のオランダ

[1]1997 年経済危機以前の日本料理店はジヤカルタの 60 軒ほどあつた。5 月暴動事件で多くの日本料理店は閉店し、その後、徐々に回復しているが 1997 年レベルまで戻っていないようである。

人に対する呼びかけである。英語の“sir”に当たる。日本で平社員であってもインドネシアに来れば現地採用の従業員に対してトゥアンであり、オラン・ブサール[2]である。

日本の平均的サラリーマン諸氏もインドネシアでは上層階級となり家事にメイド(次項)を使う身分となる。メイドの仕事は料理、洗濯、掃除、場合により育児に及ぶ。車の運転、門番、庭の手入れは男の使用人である。家庭の主婦(ニョニャ)も家事使用人に対するトゥアンである。少なくともメイド 2～3 名と運転手と雑用係を兼ねたガードマンいうのが日本人として体裁を保つために必要最小限の使用人である。

日本の主婦が手本とばかり料理をメイドの目の前で作ってやると、後でメイドが恐る恐る「奥様は日本で女中をしていたのか？」と尋ねられて面食らった。トゥアンたる者が靴磨きなどしようものなら噂の種になることは勿論、インドネシア人の軽蔑の眼にあう。

インドネシア人、特にジャワ人の信条においてはトゥアンは常に正しく、トゥアンは過失をしない、ことになっている。従ってトゥアンは謝ることはない。トゥアンが謝れば謝られる方は身の置き所がなくなる。謝りたいことがあればちょっとした贈物を何気なく渡すことで意を通じる。

インドネシア人は親しい目上の人には男性の場合は「バパ(bapak)」、女性の場合は「イブ(ibu)」と呼びかけるのが普通の気楽な関係である。従ってトゥアンの呼びかけは他人行儀であり、呼びかける方のマインドとしてはトゥアンと奉っておけばトゥアン相当のことをしてもらえるという下心がある。とかくトゥアンであることはくたびれる。バパになりたくても数年の駐在期間では無理である。

トゥアンであることの応用問題をインドネシア人の金の貸借の実例で見てみたい。トゥアンが直面する問題はインドネシア人の部下、あるいは家で女中から給料を前払いして欲しいという申し出である。それなりの必要性をもっともらしく述べる。

ダメモトでとりあえず言っているという感がするが、断るわけにもいかないので事情を細かく詮索してから貸し、返済計画を約束させて以降の給料から返済分をキッチリ差し引くと「トゥアンはケチである」という噂をたてられる。

インドネシア人にしてみればトゥアンは富裕であるから金を貸すのが当たり前で金が必要でない限り返済を請求すべきでないと考えている。金持ちの父親にフウタロウの息子が返すつもりもないのに金を貸してほしいという申し出と同じ発想である。要は“たかり＝ミンタ(minta)、甘え＝マンジャ(manja)”の構造である。

それではこのような申し出にどのように対処すべきか。金を貸す人もいる。断固として拒否する人もいる。どちらにしろトゥアンらしくやればいいのであってトゥアン自身のカルチャーの問題であってノウハウはないようである。

887. メイドとの共存

メイドのうち料理担当を「コキ(koki)」といい、掃除・洗濯担当を「チュチ(cuci)」という。メイドが多いようであるが仕事が分業になっており合理化して一人にやらそうとするとメイドは居付かず、人使いが荒いという評判がたつ。

待遇はコキ 45 万ルピア、チュチ 30 万ルピア、ハウスボーイ 25 万ルピア、ジャガ 33 万ルピアが月給の相

[2]オラン・ブサール(orangbesar)の直訳は「大きい人」で、庶民(オラン・クテル(orangkecil=小さい人)から見て、「偉い人」「金のある人」の意味になる。

場(2000 年頃)である。加えて、支給品付き、日曜日休み、長期休暇あり、語学か料理の教室へ行かせるというのが一般的である。

日本と比較すればメイドの給料は食費込みで月５千円程度と安いので、インドネシアの雇用の増大に寄与していることになる。

メイドがいて羨(うらや)ましいと思うのはインドネシアに住んだことのない素人考えで実は大変なことである。民族、宗教、文化、習慣の異なる者が家庭内にいることは緊張を伴う。しかも使用者側には家事に人を使うノウハウが途絶えて久しい。

メイド自身にも当り外れがある。使用者側にも対処の上手下手がある。その組み合わせが悪かつた場合、メイドのいるインドネシアの家庭生活は苦痛になる。インターネット掲示板「よろずインドネシア(後述 902)」でも家庭内の使用人の処遇問題が多い。

ジャカルタのメイドの出身地は中部ジャワの農村が多く、ウォノギリ(→123)が代表的産地である。複数名のメイドを使う場合、なるべく気の合う同郷が良いという意見もあるし、反対に相互牽制のため同郷を避けた方が良いという意見もある。ノウハウは経験の積み重ねであり人によって異なる。

メイドは英語で日本語では女中でありインドネシア語では「ババブ（babu）」である。しかしババブは死語になり、現在の「プンバントゥ（pembantu）」は「手伝う人」という意味であり、日本語の“お手伝いさん”と同じ気遣いがみられる。

言葉だけでなく気遣いをしても彼女らに通じるとは限らない。レバラン(→814)で帰郷するというから前払い給料と土産を持たせたが、何時までたっても帰ってこない。調べると他所へトラバーユしていた、というような話はあちこちで尽きない。

メイドがいると家の中の物がやたらと減ることがある。無くなるのでなく減るだけという処がいかにもジャワ人らしい。無くなったものは変わった場所に隠すはようにある。気がつかないでしばらくほっておくと本当に無くなる。

貧しい農村からきて溢れるばかりの物が無造作にあるのを見れば誘惑に駆られるというものであろう。無防備に物を置いておくのは彼らにとって「持って行け」との信号としか受け取らない。大事なものには鍵をかけることだ。物が少々減るぐらいはコストのうちと割り切らなければインドネシアでは暮らせない。

庵原哲郎氏の『女中スリ』はインドネシア人のお手伝いさんの目から見た日本人を描いており、教えられることが多々ある。「ジャカルタ・ジャパンクラブ（JJC）20 周年特別記念号」最優秀作品に選ばれた駐在員とその夫人（ニョニャ）必読の名作である。

888. 運転手付乗用車

インドネシアの自動車の運転マナーの悪さはひどい。前車との間に少しでも空間があれば割り込んでくる。自動車の運転免許取得はそれなりの資力と学力がいるはずであるが、どうしてあれだけ粗暴に運転できるのかと呆れる。しかし運転マナーの悪さは他の開発途上国も同じである。要するに運転マナーは所得水準の函数である。

戦後、日本へ来た外国人に日本のタクシーの運転は“カミカゼ・タクシー”として恐れられた。タクシーに限らず運転マナーは粗暴であった。日本から消えたカミカゼ・タクシーは東南アジアに転移した。

駐在員は運転手付き自動車を利用している。主婦の買物も乗用車である。インドネシアでの車の運転が粗暴で危険であることはさておいて、仮に日本人の運転の車が事故に巻き込まれると大変なことになる。

法外な賠償要求はとにかく、群がる群集の中での外国人の下手な対応は身の危険がある。外国人の運転する車でインドネシア人が事故に遭えば、事故の原因と関係なく外国人の方が悪いというのがインドネシア人のムラの論理である。

インドネシア人の運転手が歩行者を跳ねる事故を起こした場合、運転手は被害者をほっておいて急いで現場を離れ警察へ駆け込み、警察官を連れて現場に戻る。そうでないと運転手も集まる群衆にリンチに会いかねないからである。

仮に事故の場合の補償の相場（かなり古い）の目途として、鶏1万ルピア、ヤギ 10 万ルピア、水牛 100 万ルピア、人間 1000 万ルピアという目安の数値がある。《人 1 人＝水牛 10 頭＝山羊 100 頭＝鶏 1000 羽》という等価式は意味深長である。

会社が運転手付きの車を貸与してくれる大会社はとにかくとして、女中と同様に運転手を個人で契約せねばならない。給料、それ以外に残業の扱いも始めから決めておく。運転手の医療費はもとより、雇用者であるからには運転手の家族の医療費まで負担せねばならない。都度請求されるのが煩わしければ月定額で決めておく。

採用した運転手がいい運転手とは限らない。油断すれば高速料、ガソリン代、修理料はごまかされる。主人が不在であれば白タク稼業に励む者もいる。運転の乱暴な運転手にあたれば毎日が命の縮む思いである。態度の悪い運転手との密室の時間は苦痛になる。特に家庭用の場合、主婦にとって相手は小柄といえど男性である。

主婦の買い物が運転手付きの車というと贅沢のようであるが、不便も多い。運転手も休暇や休憩があるから自由に外出できないことである。帰国した主婦が一人で自転車で買物に行くことがどれほど爽快であるかをしみじみと述べていた。

インドネシアでは完成車の価格は税金が法外に高いので外車も日本車も価格差はマージナルになる。外車の中古があれば、いい機会とばかりベンツ、ボルボ、BMWに乗っている。日常茶飯事の事故を見ておれば外車の方が構造が頑丈であるという安全対策である。

⇒838.交通ラッシュ

889. コンドミニアム

ジャカルタで外国人の住む住宅地は都心のメンテン地区(→161)であったが、ジャカルタの発展とともにクバヨラン・バル（Kebayoran baru）、ポンドック・インダ（Pondok indah）、クマン（Kemang）などの新しい住宅地がひらけ、日本企業の駐在員の居住地になっている。

インドネシアでは女中数名と同居し、小パーティの開ける居間のあるくらいの広さの家が基準である。一般にインドネシアの物価は安いが、電話、温水シャワー、水洗便所付きという外国人の住むような条件の家の家賃はかなり結構なお値段で日本と変わらない。高額の前払い金を要求される。

外国人は不動産を取得は制限があるので借家住まいになる。しかし、外国人用の住居は供給が少ないこともあり、家探しはなかなかの苦行である。一旦、入居しても熱帯の厳しい気象の下では家の損耗もはげしく、

すぐ雨もりがする。その度の家主との折衝もくたびれることである。

一戸建てであれば庭にはマンゴーの樹もあるかもしれないし、声のうるさいオームを飼うこともできる。しかし一戸建ての家の中をよく見ると天井や窓にはヤモリ(→077)がはりついている。日本語で“屋守”であるごとく蚊を食べる有益な動物である。しかし小なりといえど爬虫類に属する動物である。寝床から薄明かりの中にヤモリを見つけた時はやはり気持ちのよいものではない。

蟻は遠慮かまわずに室内に這い上がってくる。日本の蟻と異なり大きくて凶暴である。かまれると痛さにびっくりする。

そこで最近、人気があるのが高層の賃貸用高級住宅である。日本の不動産屋はマンションといい、インドネシアの不動産屋はコンドミニアム(condominium)という。そこでは管理がセールスポイントである。修理は迅速に行われる。インドネシアに住む限り覚悟しなければならない盗難の心配も少ない。

コンドミニアムにはテニスコートやプールの共同のスポーツ施設が整っている。掃除の心配はない。子供の遊び場もある。日本人は金持ちだということで誘拐を心配して一戸立ちの住宅では子供も家の中に閉じ篭りがちになる。このため子供が安心して遊べる安全な場所は重大な関心事である。

洗濯、掃除は管理会社の方に頼める。食料品などの買い物は付設のストアで十分である。従って女中は“通い”でもよい。コンドミニアム入居料は一般の一戸建より割高[3]である。それでも大手デベロッパーは次々と建設し 90 年代には雨後の筍のように増えるほど人気があった。快適な居住条件にはわずらわしさからの解放があるのだろう。

かつてはジャカルタ支店長(インドネシアでは支店ではなく駐在員事務所が正式名であった)ともなると日本からの来客の接待やパーティの催せるだけのスペースのある邸宅が必要であったが、近年ではホテルや料亭で間に合うようになった。従って自宅で大きなパーティも催すこともなくなり、住むことにだけに専念すればよくなった。

890. 日本の週刊誌

つい日本の物であるという理由だけで手が出るのは“雑誌”であろう。カラオケバーの片隅でマンガ週刊誌に目をらんらんとさせて没頭している若い駐在員がいる。積み重ねてある月刊誌・週刊誌も手垢でかなり汚れている。

ジャカルタからさらにカリマンタン島のジャングルの木材現場へ単身で出張した駐在員はたまたま持参した一冊の古い週刊誌しかなかった。毎日毎日、熟読しているうちに全ページ暗記したという打ち明け話を聞いた。

日本にいる間は溢れるばかりの活字の中に居る時は見向きもしないが、不自由となるとやたらと見たくなる。日本の週刊誌には中毒的要素があるのかもしれない。このように駐在員が渇望するのは日本語の活字であろう。

ジャカルタには紀伊国屋など日本の書店が進出していて日本の雑誌の入手は容易である。しかしあふれるほど刊行される雑誌もインドネシアでは限られる。週刊誌もインドネシアへ自由に持ち込めるわけではない。

---

[3]ヒルトンホテルに隣接するヒルトン・レジデンスの場合、250 ㎡で約 2500 ドル、これに対してメンテンの邸宅は 500 ㎡で 1600 ドルとコンドミエアムの方が割高である。(小牧利寿「ゴム時間共和国インドネシア」)

問題なのはグラビアのページで裸の女性の写真はイスラム教の公序良俗からご法度で正規の輸入分は該当ページは切り取られている。

通信技術の発達で日本のプロ野球も大相撲の結果もインターネットでオンタイムで結果が分かる。しかし週刊誌の記事の類は意味深長な目次タイトルしか分からない。いきおい出張者に持って来てもらう最大の土産である。

家へ帰るとTVがあることはある。国営TV(→822)に加え有料の民間TV(→823)も発足したが、面白い番組のようでも言葉の壁がある。ニュースも総会やセレモニーが多く、偉い人が表彰したり握手したりする場面がやたらと目につく。夕方には突然に画面が切り替わりイスラム教のお祈りを促す声が流れる。

日本の連続 TV ドラマの『おしん』はインドネシアで再放送される人気番組であった。おしんの時間には女中が TV に熱中するので家事が停滞したという。今繁栄を誇る日本も、ついこの前までは現在のインドネシアとあまりかわらない貧しさであったことへの感慨もさることながら、インドネシアにない雪景色に魅入られていたのであろう。

その他、日本のマンガも放送される。日本人にとってはいくら日本の制作番組でもンドネシア語では興味も半減である。

インドネシアでNHKが受信[4]できるようになったのは一昔前の駐在員には考えられもしない近代文明の恩恵である。しかしNHKだけが日本のTVではない。日本へ帰った時、日本のTVで最も面白かったのは民間放送のコマーシャルである。

TV がものたりないからビデオを楽しむことになる。同じ映画を何回も見るわけにはいかないのでお互いに貸し借りして交換することになる。ビデオ方式が日本とインドネシアで異なるため市販のものと互換性がない。最もうれしいビデオは最近時点の日本のTVの歌謡番組であろうか。[5]

891. ラグラグ会

テフロン加工のフライパンで炒め物をしても食材はフライパンにこびりつかないことから駐在員と現地文化の接触のあり方を“テフロン現象”という。インドネシアに限らず東南アジアに共通して見られる日本人駐在員のビヘイビアーである。

しかしたまにはテフロン現象にあき足らない日本人もいる。例えばインドネシアの歌に熱中する人である。1976 年[6]ラグラグ会が結成された。当時は公使であり後にインドネシア大使の国広道彦氏の肝いりである。2001 年に 25 周年の大会が盛大に開催された。

「ラグラグ(lagulagu)」とはインドネシア語の“歌々”の意味である。日本の5倍の広さのあるインドネシア各地の歌の収集から始まる。アンボン、バタック、マナド、ミナンカバウなどの歌謡のうまい民族のラグラグが70曲以上収集されている。

インドネシアでは地方文化が根付いている。特に歌というのは地方そのものであるからその地方に行かな

---

[4]NHK の放送も有料であり、その上、放映権にからむ制約がある。例えば 2004 年のアテネのオリンピックは NHK は放映権の取得が日本国内に限定されているため、ジャカルタでの受信できなかつた。

[5] <編者註>2000 年代になってからはインターネットが津々浦々に普及したので、好きな番組を見られるようになった。

[6]<編者註>結成は 1977 年 5 月であった。結成後三回目の六月の練習会で編者もラグラグ会に参加した。

いと本物にお目にかかれない。地方に出張してまだ知られていない歌を発見する喜びは格別のものである。

民謡として地方に伝えられている歌は楽譜作りからはじめねばならない。そもそも歌というのは本来、楽譜を見て歌うものではなく、耳から聞いて覚えるものだという歌の原点に戻る。仮に楽譜があってもインドネシア人の楽譜は数字楽譜であるから“♪記号”への翻訳からはじめねばならない。

日本人が知っているインドネシアの歌にはクロンチョンの名曲『ブンガワン・ソロ(→985)』がある。『可愛いあの娘(nonamanis ノナ・マニス)』は作曲家の浜口庫之助が第二次世界大戦中にインドネシアで仕入れたものであり、歌詞はインドネシアの直訳である。

ラグラグのメンバーには学生時代にコーラス部でならした喉の持ち主もいるし、インドネシアへ来て初めて歌を歌う人もいる。各々がスカイラインビルの JJC の一室で水曜の夜の一時を楽しんでいる。

ラグラグ会で日頃練習しておいて会社行事の何かの機会にインドネシア語の歌を披露すればインドネシア従業員もびっくりして“トゥアン”を見直すといった労務対策の奥の手という用法にもなる。

それはとにかくとしてインドネシアに滞在して日本語のカラオケバーしか通わない連中と比べるとインドネシアの歌のいくつかをマスターすることはそれなりの充実した駐在期間である。歌もインドネシア理解の一助であろう。

ラグラグ会の会則の特徴は①女人禁止、②統一背番号、③卒業試験がある。①は家族にも無視されているということらしい。②は現在 670 名に達している。番号順が重んじられる。③は2曲以上を独唱しなければならない。

日本に帰国してからも東京、大阪、福岡には支部があり、横断的なインドネシア駐在員同窓会として機能している。ラグラグ会には久しぶりのバティック・シャツ(→782)を着ていそいそとでかける。

892. カラオケの夜

世界各地で日本人の最も好きなものはカラオケと思われている。日本人にはゴルフとカラオケというのが内外を問わずの日本人接待の定番である。

事実、カラオケにかける日本人の熱情には頭が下がる。日本の最先端の電子技術がカラオケに導入されている。カラオケ需要のために日本の電子技術が飛躍的に発展したという説もある。要するに日本人のいるところにはカラオケがある。

ジャカルタにも日本人の行くバーにはカラオケがある。ジャカルタ駐在員にとってカラオケ・バーはまさにオアシスのようなものだ。日本語のカラオケ・バーも増えすぎて新陳代謝が激しい。

カラオケ・バーでは中年は演歌に自己陶酔し、若いのは手垢のついた古いコミックを嘗め回すように読んでいる。昼間は颯爽(さっそう)とジャカルタのビジネス街を肩をきって歩いている日本企業戦士もここでは平均以上でも以下でもないただの日本人である。

カラオケはインドネシア人にも流行しインドネシア語のものもある。しかしインドネシア人はアルコールを飲まないので日本人と一緒に歌うことはない。それでも何かの拍子にはインドネシア人のカラオケにも付き合わねばならぬ。

インドネシア人の愛唱する日本の歌である『愛国の花』は戦時中の従軍看護婦の歌として古関祐而作曲のものである。「真白き富士の気高さを心の強い盾として…」という歌詞で始まる。この曲はスカルノ元大統領の

気に入りで自ら『ブンガサクラ（bungasakura＝桜の花）』というインドネシア語の歌詞を作っている。日本の軍歌をインドネシア人から教わるのも変な感じである。比較的新しい日本の歌では谷村新司の『スバル』がインドネシア人に親しまれている。谷村新司はまさにインドネシア人の顔である。その他は五輪真弓『雨宿り』、テレサテン『空港』『つぐない』、中西保志『最後の雨』etc である。

中国語のカラオケもある。香港あたりで製造されたものがジャカルタに持ち込まれたものらしい。かつては中国系インドネシア人は中国語のカラオケを自由に楽しむわけにはいかなかった。問題は漢字で出てくる歌詞である。

インドネシア当局は中国系住民の同化促進のため文教政策として漢字を追放した。街には漢字の看板を見かけることもない。プラナカン(→677)といわれるインドネシア生まれの中国系インドネシア人は漢字が読めないので日本人に教えてもらっている。

そこまでやったのにカラオケを通して漢字が復活するのではないかと恐れ、当局は苦々しい思いで「漢字のビデオはあいならぬ！」と時々警告を発してきたが、最近は対中国文化政策が緩和され漢字も解禁された。

インドネシアの経済振興のためには中国系インドネシア人の国内投資を増やしてもらわねばならない。台湾や香港から観光客が増えているが、観光客がカラオケに行って不愉快であるとなればインドネシアにとって拙いからである。カラオケは日本語、ハングル語、中国語、インドネシア語入り乱れて花盛りである。

893. アルコール飲料

コーランで禁止されているのでイスラム教徒であるインドネシア人はアルコールを飲まないことになっている。しかし、ビールやウィスキーは売られているが価格は高い。以前は税を賦課するほど需要がないので一般の奢侈品に対する商品税どまりで日本と比べると安かった。アルコールへの課税が高額になってもアルコール飲料の存在が認知されていることはありがたいことである。

イスラム教国の中でも戒律に厳しいサウジアラビアではイスラム教徒に限らず国内でのアルコールは厳禁であり、非イスラム教徒の外国人といえども容赦されることはない。アルコール類は保持すること自体が犯罪行為である。日本のマリファナと同じ位置付けである。サウジアラビアへ入港する外国船の船長の仕事は領海に入る前にアルコール類を厳重に封印することである。

従って酒飲みには同じイスラム教国でもサウジアラビアと比べるとインドネシアは天国である。インドネシアのイスラム教徒も 100%禁酒を実行しているわけではない。田舎でトゥアック(→837)というヤシ酒を製造し飲んでいるのはイスラム教徒である。飲酒の際は「アッラーは見ていない」というのが彼らの言訳である。

しかしながらイスラム教国であるから酔っ払いは軽蔑されるし見かけることもない。仮に自分が酔っ払っているところを警察の検問にあえばブングリ(→749)をふんだくられる。もし道で白衣の FPI(→753)の一行にでも行きあえば傷害を受ける恐れもある。

ということでアルコールが入手可能でもインドネシアではそれほど飲みたい気分にもならない。そもそもアルコール飲料は寒い地域で体内から温まるという防寒対策に起源がある風土の産物である。

アルコールには文化が伴っている。南欧ではワインが合い、中欧ではビール、北欧ではウィスキー、日本では日本酒がある。これらはその地で飲むものである。日本酒は日本の寒い夜に縄ノレンの店でオデンをフウフウ吹きながら熱燗で飲むもので、椰子の樹を見ながらサテサテを当てに飲むものではない。それにインド

ネシアで販売されている日本酒も保存剤が混入されているせいか美味しくない。

インドネシア国産の「ビンタン（BINTANG）ビール」は植民地時代からのオランダの「ハイネケン（Heineken）社」のビール工場を接収したものである。技術者も引き上げたのでインドネシア人が操業していた間は味が落ちたそうである。オランダと和解して技術者が戻ってきてビンタンのブランドが定着した。ビンタンは味も緑色の瓶の見かけも本国のハイネケンにそっくりである。

ビンタンビールとそつくりの Bintang Zero というのがある。中味はイスラム教徒用のジュースである。外国人との付き合いの席でのイスラム教徒用であるが、外国人間の付き合いでの下戸にも利用されるのだろう。

894. ゴルフ三昧

ジャカルタではゴルフ場も市内から車でせいぜい半時間程度の近さである。その上に、料金も安く平日は予約もいらない。駐在員夫人もゴルフの腕を磨くチャンスである。

暑いから普通の人はプレーも午前中であるが、日本人と韓国人は午後もプレーする。韓国人は暗くなって見えなくなるまでやる。日焼け防止にいくら注意してもゴルフの回数が日焼けに比例することは避けられない。

そもそも英国人と異なりオランダ人にはゴルフの趣味はなかった。かつてのジャカルタ駐在員は隣のマレーシアの英国の置き土産の立派なゴルフ場に引き換え、ゴルフ場のないインドネシア勤務の不運を嘆いた。しかし最近ではインドネシアでもゴルフ場も増えた。

駐在員のみならずインドネシアの要人もゴルフを楽しむ。アポイントをとるのに苦労する要人ともゴルフ場で簡単に会える。某ゴルフ場ではスハルト大統領のゴルフ姿もかいま見ることがあった。

コースには池がある。そこでは子供が池の中で待っている。どういうわけかボールは池に引き寄せられる。ボールが池に落ちると待っていた子供が喜び勇んで拾ってくれるが、当然有料である。ロストボールより安いからやむをえない。

キャディは先に行って打ちにくいところのボールは足で蹴って動かしておいてくれる。かつてはインドネシアでゴルフをするとホールインワンが多発した。客がグリーンに来たときに一緒になってボールを探すふりをして、ホールインワンであることを告げる。キャディも手をたたいてお祝いをしておけばなんらかのチップも割増にもありつけるだろうという魂胆もあろうが、単なる ABS 精神(→572)に基づくサービスであろう。

最近はこのようなサービスは客が嫌うということでなくなったが、それでもキャディは客のために誠心誠意仕える。これはキャディ同志が自分のトワン(主人)に賭けているので悪いスコアだと困るからだ。この辺の図式はキャディが騎手で客は馬ということになる。一般にインドネシア人は賭ごとが好きで、何事にも賭ける。

東南アジアの観光地にはゴルフ場がつきものになってきた。そこには必ず日本人とそれに続く韓国人がいる。日本や韓国の観光客誘致のためにゴルフ場が作られたといってよい。リゾート地ならとにかくバリ島へ来てゴルフをするだけのツアーもある。歴史、文化の溢れる島でどこでもやれるゴルフをやりたがるのはどういう理由か。しかし接待する方から見ればゴルフは手間がかからず喜んでもらえるからゴルフ場へ送りこむに限るいうのが駐在員の本音である。

最近はゴルフ場の存在が社会問題となってきた。開発業者が農地を買い上げて作ったゴルフ場が雨後の

筍のように増えた。ゴルフ場をインドネシアが豊かになったことの証明として許容する賛成派に対して、反対派は農民から農地を取り上げ、薬剤を散布し環境を破壊するものと弾劾する。

895. そこに山がある

自宅から会社へは運転手付きのカー通勤である。出社後もあまり歩くこともないから運動不足になる。健康管理のため何かスポーツをせねばならない、ということでジョギングやテニスを始めても日本からの客があり数日欠けるとついなおざりになる。

通勤にも歩くことの少ない駐在員にとって運動不足解消をせねばならないが、インドネシア式の集団行進(→824)には抵抗があるし、治安の問題で散歩もままならない、ジョギングも限られたコースでは飽きる。新しいコースの開拓は追いはぎに出くわす心配が優先する。その時インドネシアの山々が招く。

インドネシアで山登りは在留の外国人の方が熱心である。インドネシア人に山登りは普及していない。彼らにしてみればわざわざしんどい目をして山登りするのは正気に思えない。汗をかくことを嫌うインドネシア人にとって重い荷物を背負い坂道を歩くのはクーリーの仕事である。確かに息を切らせるようにして登った火山の火口の硫黄ガスの中から背中一杯の硫黄を担いで現れた労働者と出くわすと複雑な気持ちになる。

地元のジャワ島の 3000mを超える高山は 12 あり何れも火山である。富士山のようにコニーデ型の独立峰の美しい山容である。これらの山は登っても登っても人家と畑があり、景観に変化が少ないので登り甲斐(かい)がないのが難点である。

とりあえずは近くの山(→112)になる。ジャカルタの南 100km も行けば、手頃なグデ山(2958m)、パン(グ)ランゴ山(3019m)、サラク山(2211m)がある。

山登りのためには装備と地図が必要であるが、インドネシアで地図をそろえることは難しい。地図もジャワ島は 5 万分の一があるが、バンドゥンの国土地理院でないと入手できない。市販の地図があっても必ずしも正確でない。

山の高さは資料によって異なる。日本人はどれが正しいのかイライラするがインドネシア人にとって山の高さが少々変っても生活に影響があるわけでないのでキラキラ(→581)である。仮に山に登っても最高地点にこだわらない。三角点に手で触れてみないと落ち着かない日本人の奇特なまでの几帳面さと対照的である。

名の知れた火山は国立公園に指定されており、登山口は国立公園の中にある。管理事務所で入山料金を払い登山許可書をもらわねばならない。外国人は KTP、KITAS、パスポートの写しもいる。

登山口の村落にはガイドがいる。登山者にうるさく声をかける。入山の許可と引き換えにガイドと称するポーターを雇うことを強制されることもある。しかし彼等は山にそれほど詳しくはないことは直にバレるが、山賊除けの呪(まじな)いくらいの効用はある。

火山を登るほどに噴火後の荒々しい山肌が残っている。しかし中には平地に見られない高山植物もある。西ジャワの火口原の平地にはエーデルワイスによく似た花が咲く草原がある。最近ではインドネシアでも若い人から山登りする人が現れるようになった。特に学生のパーティと山で一緒になることが多い。

896. 温泉気分

火山があり地熱のある所に地下水があれば温泉となる。火山国であるインドネシアは当然のこととして温泉国である。しかし温泉の湯のほとんどは利用されずに垂れ流しになっている。トバ湖(→087)では温泉の熱湯が崖を滝のように流れる所もある。

インドネシア人には温泉に入る習慣がない。南の国の風呂とはマンディ(→803)という水浴である、ほてった身体には水の方が気持ちがよい。インドネシアで熱い湯に入るのは石川五右衛門が受けた刑罰であって一般的習慣になっていない。

最近はガイドブックを調べるとインドネシアのあちこちに温泉がある。世界各地で温泉のある所は少ないから非火山国の駐在員からインドネシアは羨まれる。

ジャカルタ近郊ではサラック山(→114)の中腹のカワラトゥ(Kawah Ratu)温泉は不便であるので登山のつもりでないと行けない。便利なところではガルット山(→110)の西北にチパナス温泉がある。「チパナス(Cipanas)」とは正にスンダ語で「熱水＝温泉」である。スカルノ大統領の気に入りの別荘もある保養地である。

バンドゥン東方の「チアトル(Ciateur)」は有名な温泉であるので、さてとばかりに出かけるが、要は遊園地の子供プールである。もっとも特別料金の鍵付きの個室なる家族風呂もある。中は魚の孵化場のようにコンクリート剥き出しの水槽で、家畜の水浴場の感じである。

地方の鄙(ひな)びた温泉はいかにと山をかき分け温泉にたどり着くが、あるのは農作業用の物置のようなみすぼらしい小屋である。猿や猪が利用するなら致し方がないが、人間様用としては御粗末である。温泉利用の起源は日本軍の占領中であったというところが多い。

一層、小屋などない露天風呂の方がよい。プラハン・ラトゥ(→111)から少し先の「チソロック(Cisolok)村」に川岸から湯の出る露店風呂がある。山中であるがやはり素っ裸はまずい。どういうことでインドネシア人が見るか分からない。彼らは人目のあるところで水浴はするが、水浴用の衣服は着用しており、決して裸にならないからである。マナドには田圃の中に湯が沸いているような温泉がある。

総じてインドネシアの温泉は湯温が低く30℃くらいである。いかに南国とはいえ山中ではぬるくて上がれない。ちなみに日本へ来たインドネシア人のカルチャー・ショックは銭湯である。一つは裸であり、もう一つは沸騰するかに見える熱湯である。

要するにインドネシアの温泉は日本人の期待する温泉とは別物である。山や渓谷、あるいは海や島の眺望を取り入れてある、小道具の岩の組み立てに趣がある、上等のタイルが敷き詰めてある、露天はまたそれなりの野趣がある、これが日本の温泉である。

温泉というのは硫黄などの成分を含んだ熱湯があればよいものではない。日本には千年以上の歴史が育んだ温泉文化がある。外国の温泉に入っても満たされないのみならずフラストレーションが高じるだけである。これならいっそう日本土産の“温泉の素”で入浴し瞑想にふける方がましだ、ということになる。

897. 何より健康管理

かつて VOC 時代のバタビアはヨーロッパ人によって“白人の墓場”と恐れられた瘴癘(しょうれい)の地であった。衛生設備の普及で最近では熱帯にはびこった伝染病は影を潜めている。消化器系の病気は今も盛んであるが、

薬で治療ができる。

最も代表的な伝染病であるマラリアは市街地ではほとんど絶滅している。しかし、僻地へ出かける時には蚊取線香は必需品である。ちなみにデング熱も蚊がウィルスを媒介する伝染病である。都心でホテル暮しをしていても感染する。高熱の後に内出血で湿疹状態になる。日本にない病気であるので赤くなった肌にびっくりする。

注意を要するのは肝炎である。A型・E型の経口感染は刺身のような生物(なまもの)に気をつけることである。B型・C型は病院の衛生管理の問題である。

排気ガスで空気が悪いので呼吸器系も要注意である。ジャカルタで治らなかった喘息(ぜんそく)が日本へ帰ったら治った人もいる。ジャカルタの大気汚染は相当にひどい。

家庭内の使用人から移る病気もある。インドネシアでは貧しい人が多く、治療もなおざりであるから結核患者が多く菌の強度も高いらしい。潜伏期間が長いのでメイドを雇う時も健康診断書は不可欠の書類である。家族の安全のためには継続して定期健康診断も受けさせねばならない。

破傷風菌も熱帯では恐い。怪我をすれば破傷風の手当てをせねばならない。病気ではないが交通事故の確率もはるかに高い。

今、ジャカルタで心配なのは“心の病”であろうか。タフに見え健康そのもののと思われた者が無気力に天井を見上げている。カルチャー・ショックに外国不適応症はあちこちで聞く。一般には繊細な人がかかりやすく、鈍感な人は大丈夫であるが例外も多い。

とにかく何かの病気の際は近代設備の整ったポンドックインダー病院かプルタミナ病院に駆け込むことになる。病気になった時も支払能力があることを明らかにしないと治療は受けられない。状況により前払いも必要である。不時の入院に具えて現金を用意しておくのも健康管理の一環である。

ジャカルタに日本人の医者がおり駐在員とその家族の診療にあたっていた。タケノコ医者としてインターネットで医療相談に応じ全駐在員から頼りにされていた。ところが医者本人が結核と宣告されてインドネシアでの診療を禁止された。本人は医者であるから結核であるかどうかは分かるが、インドネシアではインドネシアの医者が結核といえば日本の医者が異議を挟む余地はない。

インドネシアの医療に問題はあるが、逆のケースで日本でも似たようなことがある。日本在住のインドネシア人研究者が健康保険や通訳の手配と診察を受ける前のトラブルでたらい回しになっている間に死んだ事件があった。医療をめぐる国籍の壁は難物である。

⇒808.熱帯病マラリア

898. ウエルカム・シャワー

高温多湿の地は細菌の繁茂の最適値である。コレラ菌、赤痢、アメーバ赤痢、腸チウス、パラチウスは著名な菌であるが、その他にも有象無象の菌は一杯いる。最もかかりやすい疫痢の類はいくら衛生面で気をつけても不可抗力に近く下痢に悩まされる。

着任して間もなく単身赴任中のホテル住まいの下痢は思い出すにも情けない。便所の扉の開け閉めの時間ももどかしいため、ベッドの寝る向きを便所に近い位置にかえ便所の扉を明けたままにし、ベッドに居る時

間より便所に屈む時間の方が長くまんじりともしない夜を過ごした。

耳にタコができるほど聞かされてきた水への注意はいささかも怠りはなかったはずだが、思い返せば歯磨きの水しか思い当たらない。

先輩に聞くと出発前の壮行会に加えて、飛行機の中でこれが最後とばかり日本食を食い貯めし、緩衝時間も設けずに高温多湿のインドネシアへ来れば、胃腸が拒絶反応を起こすらしい。インドネシア初訪問の人がかかるので“ウエルカム・シャワー”ともいう。

インドネシアでは下痢をするのはやむをえない。下痢になれば脱水症状にならぬように水分を補給するだけだ。同じ物を食べても古顔氏は泰然として、とにかく免疫をつけることだという。確かに熱がでるようなひどい下痢も一度やると免疫がつくようである。しかし何を食べても平気という胃腸の丈夫な人がうらやましい。

下痢は必ずしも細菌のせいばかりはなく冷房のききすぎにも原因があるらしい。床が大理石であるビルや住宅では、上半身が気持ちが良い時は下半身は冷え過ぎになっている。予防には日本の昔ながらの腹巻が有効であり、ひどい時は“使い捨てカイロ”に限る。

インドネシアの薬はジャムゥ(→863)はビタミン剤のようなもので治療薬ではない。薬草を飲むには勇気がいる。欧米から輸入の売薬はあるが、かなりきついので副作用が心配だ。病気になった時はやはり頼りになるのは日本の薬だ。そういえば「正露丸」や「ワカマツ」はインドネシア人も愛用している。

何年か前、日本人観光客がバリ島でコレラに感染するという事件があった。以降に予定されていたバリ旅行のキャンセルが続発した。日本人観光客が来なくなればバリ経済は大変なことになるのでインドネシア側も必死に調べた。

不思議なことにコレラに感染したのは日本人の若者だけであり、他の外国人観光客にコレラ感染者はいなかった。従って日本人の利用する日本食レストラン、プールなどが集中的調べられたが、原因不明のままうやむやになった。結果的には日本人だけが感染するコレラであったことになる。日本の衛生が病的に清潔過剰の中で純粋培養されているため、日本人の胃腸は無菌状態らしい。

当世の日本人はアレルギー症に苦しんでいるが、インドネシア人にアレルギー症はない。インドネシア体験の医師[7]が寄生虫との共生がなくなったことがアレルギー症の蔓延(まんえん)の原因であると述べて話題になった。

899. 日本人学校

インドネシアにある日本人学校は日本人会によって設立されたもので法的には私立学校の位置づけである。ただし教師は文部省から 3 年交代で派遣される。音楽や家庭科、幼稚園にはローカル採用の先生である。1996 年にビンタロ(Bintaro)地区に移転した。

1 学年 2～4 クラス、1クラス 30 名以下である。親の教育程度を反映して質はよいにもかかわらず、日本と比べると学力は遅れている。その原因は生徒のビザ更新、学校の行事などで授業日数が足りないこともあるが、一番の要因は子供の意欲である。

インドネシア人の様子を見ておれば子供心にも一心不乱に勉強する者が馬鹿らしく見えるらしい。スポーツクラブには熱心だが、勉強はおろそかになる。子供がのんびりするのに耐えられない親もいるので日本か

[7]日本人の雑菌に対する抵抗力、アレルギー問題とも藤田統一郎医師の『ニッポン亜熱帯化宣言』による。<編者註>同藤田医師の著書「笑う回虫」がおもしろい。

ら進出した塾があり繁盛している。

以前は高校への入学のために中学 2 年生辺りになると家族は帰国して単身赴任になるケースが多かったが、帰国子女枠ができてからは受験勉強に精を出すよりは初めから帰国子女枠を当てにするというルートもできた。

日本へ帰れば“インドネシア帰り”と不潔がられていじめられる話を聞けば帰国を怖がる子供もいる。子供の脅えは母親に伝染する。したがって中には日本へ帰らずに国際学校あるいは地元学校へ行く者もいる。日本社会の疎ましさは外部からはよく見える。

生徒は駐在員の子弟が圧倒的であるが、日本国籍を有する者に門戸は開かれおり、日本人とインドネシア人の混血児もいる。しかし難しいのはインドネシア人に嫁ぎ帰化した日本人の母親が子供を日本人学校に入れたいというケース、東京に永らく駐在し日本の公立学校で日本語教育に慣れたインドネシア人の子供がジャカルタに帰国して日本人学校へ行きたいというケースである。日本人学校は日本国籍の子弟と限定されており、インドネシアの学制においても自国民が外国人学校へ行くことを認めていない。

先生も駐在員の子弟もその親も在籍の年限は予定されているから学校自身に帰属意識はない。せっかくインドネシアにいる機会だからと地元の学校との交流を試みたが、なおざりであった、というのが石井光信校長の手記『ジャカルタ日本人学校の日々』にある。

日本人学校の所在地はどこであっても最遠方者は 1 時間もかかる。送迎用の通学バスがあるが、金持ちで脅せばすぐに金を出すことで国際的に知られている日本人であればインドネシアでも誘拐犯にねらわれることは覚悟せねばならない。

父兄が持ち回りでバスを自家用車で尾行する。バス・イクット（ikut＝同行する）という。バスの警護というよりは非常時の連絡係である。幸いにしてインドネシアでの日本人誘拐事件は生じていないが、何時生じてもおかしくない。

暴動が起きそうな時は始めから休校になるが、スハルト大統領を退陣に追い込んだ 1998 年 5 月暴動(→403)の際には帰路での暴動発生のため 770 人の子供が学校に泊まり込んだこともあった。1997 年頃からインドネシアの政情不安のため駐在員も単身赴任が増え、日本人学校の生徒数も減ったままである。

900. 警察とのつきあい

インドネシアに駐在しておれば一度や二度は警察の検問に引っかかり、腹立たしい思いをしている。夜、車の一斉検問がある。日本人が運転しておればスピード違反とか信号無視とか言いがかりは何とでもつく。

運転手がインドネシア人の場合も乗客が日本人と分かればややこしいことになる。ましてアルコール臭ければ執拗に迫ってくる。提示するのはパスポート、ID カード、警察発行の黄色い手帳、労働許可の茶色の手帳、移民局発行の緑色の手帳を保持しておれば見せて一件落着になるのかもしれない。

実際に外出する際に書類一式を所持する人はいないから、何かの書類がなければ「詳細に取り調べる必要があるから警察へ来い」という。探求心が旺盛で閑ならば行ってもよかろうが、一晩牢屋に放り込まれるくらいの覚悟が要る。仮に牢屋でなくても書類を取り上げられると戻ってくる保証はない。

先方も好き好んで牢屋へ入れたいわけではない。単に「目をつむってやるから金をよこせ」の信号にすぎ

ない。ダマイ（damai＝和平）方式[8]といわれるインドネシアでは馴染みのシステムであり、別に日本人に悪意があるわけでないが金持ちの日本人は彼らの金蔓（かねづる）である。

インドネシア人警官でも知っている日本企業の名刺や身分証明書を出しても先方にたかりがいがあると喜ばすだけである。こんな時、以前ならスハルト大統領と一緒の写真、特に握手しているような写真が免罪符として有効であった。先方の面子を立てねばならぬから何気なく見せるのがコツである。「ノープロブレム」で一件落着となったが、1998 年の 5 月政変以後はスハルト氏の写真の免罪符の効験は当然無くなっている。従っていくらか値切ってダマイ方式の解決が現実的である。

問題があるのは警察だけでない。ハリラヤ(→814)が近くなると役人どものせびりは事務所のみならず家にもやってくる。警察、労働省、入管、市役所を問わない。許認可に問題があるので出頭せよ、との電話がある。行けばなんだかやと言う。規則が不明確であるからどんな因縁をつけることもできる。要は物入りの時期になったから集金に協力せよとのことで、プングリ(→749)による「チャリウワン（cariuang）＝金儲け」である。

金を払う以上は「領収書をよこせ」と言えば怪しげな紙をくれるが、場合によっては相手を怒らせて解決料の上積みを要求されることもある。

泥棒に侵入されれば日本ならばすぐさま警察にいうところであるが、インドネシアではしばらく考えた方がよい。警察が来て盗難を説明すれば捜索費を要求される。捜索費を出しても盗難品が戻ってくることはまず期待できない。賢明な人は著名なドゥクン(→866)に盗難品の有り場所を聞き出して自分で探しに行く。

信用できない警察は何もインドネシアだけの問題でない。シンガポールを除く東南アジア一般の問題である。“盗難アジア”という。⇒877.空港の公務員

901. 外国人料金

パサール(→864)では売手と買手の庶民が打打発止と値段の交渉に余念がない。地方語の話せる人だけの世界である。野菜などパサールでの買い物は日本の主婦が買うよりメイドに買わせた方が安い。メイド(前述887)はローカル価格で買うが、ニョニャ（奥さん）が買うよりは安い価格を報告し、差額はメイドがいただく。メイドもニョニャの双方がハッピーであるはずであるが、メイドのピンハネに我慢できないニョニャもいる。メイドを叱り飛ばせばメイドはインセティブがないから質の悪い野菜を高い値段で買う。ニョニャには日本人価格で買うかメイド界の慣行を受け入れるかの選択しかない。

市場での売買は売手と買手の交渉で決められ自ずから一物一価の相場が出来るのが経済学で学んだことである。しかしインドネシアでは同じ商品が相手によって異なる。物の値段は多く買うかどうかより、買手が地元の住民であるかどうかによる。多くまとめ買いできるような人は高い価格を払うべきと思っている。

まして外国人は金持ちだから高い値段で売りつけるのは当たり前である。外国人の中でも特に日本人は金持ちとして絶好のカモである。パサールの値段にはローカル価格、白人価格、日本人価格の 3 通りある、といわれる。

その中でも最も高いのは観光客価格である。観光客にとっては日本人価格であっても日本で買う価格と比較すれば安い。このため日本人価格が上がり駐在員が迷惑する。

[8]パトカーに追跡されればパトカーが拾いやすいように現金入りの財布を落とせば追跡を免れるという話もある。

警察の取り締まり(前項)においても同じ交通違反に対する罰金でもインドネシア人は1万ルピア、仮に日本人が乗車しておれば 5 倍くらいになる。郵便料金も外国人とインドネシア人で異なる。発信人が日本人であれば高く請求される。インドネシア経験の豊かな人はインドネシア人の名で発送するそうだ。

水道、電気、電話など公共料金も請求書はチェックしなければならない。桁の間違いはキラキラ(→581)の範疇を超えている。掛け合えばシブシブ認めるが、「切ってもよいのか」とのソンボン(sombong=慇懃無礼)な脅しを受ける。外国人への吹っかけ請求は“ばれて元々”の悪意が感じられる。

外国への一時出国に「フィスカル(FISCAL)」という出国税がある。インドネシア人と外国人の長期滞在者がその対象である。インドネシア人で外国へ出かける人はそれなりの高額所得者であるから負担感もないかもしれない。ジャカルタ駐在員はビジネスで出国・入国を繰り返す都度、高額の出国税を払わねばならない。出国税は外国人を標的にした最も取り易い税だからである。1998 年 5 月暴動で駐在員の帰国ラッシュの際に出国税は 25 万ルピアから 100 万ルピアに値上げされた。

外国人からふんだくろうというのはイスラム教徒の庶民から公務員ばかりでなく、国家も同じ発想なのだろう。コーランではイスラム教徒以外からの盗みを奨励していると邪推したくなるほどである。

902. よろずインドネシア

「よろずインドネシア」というのは文字どおり、インターネットホームページ(HP)のインドネシアの情報への入口である。インドネシア情報のHPは日本語に限らず、英語・インドネシア語などどれだけあるか分からない。

その中で「よろずインドネシア」へのアクセス件数は群を抜いているだろう。特に掲示板は特色がある。余り多いのでバリ欄、経済欄、医療欄を設けて交通整理している。インドネシアに駐在する日本人(or 日本語)のインターネット・オンラインの情報交換の場である。収入は会員の会費とわずかな広告料だけであり、ジャカルタ駐在員のボランティアに支えられている。

1996 年 5 月に開通して以後、インドネシア政治社会情勢の悪化に伴い、生の貴重な情報源となった。特にその存在を高めたのは 1998 年 5 月の暴動事件である。スハルト政権断末魔の社会混乱のジャカルタ情報は日本の新聞のトップ記事で報じられた。

政情不安定でジャカルタの治安が不穏のため、在留邦人はインドネシアの社会情勢の動きに神経過敏になり情報を求めた。日本大使館でも海外危険情報の HP があり、折りにふれて情報が流されているが、公式発表は確かかもしれないが、遅いのが欠点である。

“よろず”では今現在の行進中のデモ隊の様子が流される。進行方向、参加人数、昂奮度合いの情報がオンタイムで分かる。多くの駐在員やその家族の国外脱出かインドネシア在留を決める最終判断は“よろず”の情報であり、アクセスが殺到した。

情報の中で噂話(→586)が大きなウエイトを占める国であるから、平時においては日本人への井戸端の提供である。スハルト元大統領が何回も重態になる誤報も乱れ飛んだ。多いのは買い物や電気器具の生活情報である。

女中、運転手の処遇や結婚式の祝い金の額の相談、前借りの申し出への対処は駐在員とその家族にとってはインドネシア生活で初めて体験する難題は掲示板で助言を求めれば誰かが色々とおしえてくれる。レストランの評判、音楽やスポーツの趣味の情報交換もある。インドネシアの歌手やタレントのミーハー情報も流

れる。聞きかじりを会社のローカル・スタッフに教えてやれば、インドネシア人が感心する。

一日に何度も掲示板をのぞいて見る“よろず中毒”症状もでる。こういう人はインドネシアの通信事情から“よろず”が繋がらないとパニックになる。

政治問題、宗教問題では白熱の論戦が展開されたことがある。井戸端会議というより囲炉裏端会議である。インドネシア人と結婚しインドネシアに根をおろした人の主張には迫力がある。インドネシアに限定されない文明論に果てしなく拡大していく論争もあった。しかし掲示板と壁新聞は区別すべきという主張により、硬派の投書はどこか別サイトに移動したらしい。[9]

インドネシア人に対する中傷誹謗の意見が述べられると反論もあり、延々と続き歯止めがなくなる。日本語の分かるインドネシア人が見ていること思えば複雑な気持ちである。

生活編　終

[9]〈編者註〉この掲示板によく投稿していた人たちが 2000 年頃から体調不良やら自分自身の都合で書き込まなくなった。

著者**大槻重之**（おおつきしげゆき）

著者略歴

1938　京都府綾部市に生まれる

1961　大阪大学経済学部卒業

関西電力入社

以降主として燃料業務に従事

1998 関西電力退職後三田市に居住

著書「燃料が電気をつくる」1972

「インドネシア百科」1991

「バリ島百科」1992

「マレーシア百科」1993

「続・インドネシア百科」1994

「石炭をゆく」1998

インドネシア専科（第 9 巻）Ｇ生活編

発行日平成 20（2008）年 8 月 25 日

著者大槻重之

発行者大槻重之